

研究ノート インドネシアにおけるイスラーム学習活動の活性化 -- 大学生の関与とそのインパクト

著者	中田 有紀
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	46
号	1
ページ	35-52
発行年	2005-01
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007623

インドネシアにおけるイスラーム学習活動の活性化

大学生の関与とそのインパクト

なが た ゆ き
中 田 有 紀

はじめに

イスラーム学習活動の改善にむけて
バンドゥン市 A 村におけるイスラーム学習活動の
変化
バンドゥン市 A 村における教育活動の担い手と運
営形態
おわりに

はじめに

1990年代以降、インドネシアでは、子どものためのイスラーム学習活動が、急速に活性化した。クルアーン幼児／児童教室（Taman Kanak-kanak Al-Qur'ân /Taman Pendidikan Al-Qur'ân，略語 TKA/TPA）が各地に設置され、標準カリキュラムやクルアーン速習法を用いた学習が行われるようになった。従来のイスラーム学習活動は、地域のモスクでクルアーン教師（guru ngaji）によって伝統的な形で営まれてきた。しかし、近年の新しいイスラーム学習活動には大学生が関わり、発展の中心的な役割を果たした。彼らは、1970年代～80年代に社会・政治活動を制限され、その後、イスラーム学習活動にそのエネルギーを注いだ。

イスラーム学習活動は、クルアーンの学習を中心に、イスラームの教義に基づいたムスリム（イスラーム教徒）としての規範を学ぶ。これは

ムスリムがイスラーム共同体で主体的に営んできた学習活動である。「知識ある者が知識を伝える」というイスラームの伝統に支えられてきたが、その内実は、近年大きく変化した。

子どものためのイスラーム学習活動の活性化は、近年のインドネシアにおいて、イスラーム・アイデンティティがどのように育成され、強化されているのか、その内実を捉える上で、考察の対象として欠かすことができない。そのためにはフィールドワークの中で詳細なインタビューと観察を繰り返し、教授・学習活動の実態を多角的に捉えていくことが必要となる。

大学キャンパスを中心とした大学生によるダーワ（伝道）活動の政治的インパクトに関する研究〔見市 2002〕はなされてきたが、学生がキャンパスの外で展開してきたイスラーム学習活動の実態やその変化に焦点を当てた研究はほとんどなされていない^{〔注1〕}。イスラーム学習に関する先行研究には、プサントレン（イスラーム寄宿塾）で学ぶキタブ（イスラーム教義書及び注釈書）に焦点を当て、インドネシアのイスラームの伝統やその歴史的意義を考察した研究〔小林 1988；Bruinessen 1995〕や、イスラーム神秘主義教団の発展とその実態を捉えた研究〔Bruinessen 1992〕などがある。また、マドラ

サヤブサントレン、イスラーム宗教大学など、制度的に整えられた教育に焦点を当てた研究もなされてきた〔例えば西野 1990；服部 2001〕。しかし、地域社会で営まれるイスラーム学習活動にはあまり関心が向けられず、固定的なクルアーン学習のイメージ〔Yunus 1959, 34-35；Dhofier 1982, 19-20など〕に留まっている。

本稿では、近年のイスラーム学習活動の活性化に大学生はどのように関与してきたのか、バンドゥン市内の一つの地域社会に焦点を当てて検討する。まずはじめに、では、クルアーン速習法（IQRO: イクロ、以下イクロと略称）やクルアーン幼児／児童教室が全国的に展開される際、大学生はどのような役割を果たしてきたのかを組織の活動に焦点を当てて検討する。続いて及びでは、地域社会の学習活動が、大学生の関与を通してどのように変化したかについて、バンドゥン市 A 村の事例に即して考察^{注2}する。

イスラーム学習活動の改善にむけて

1. 伝統的な学習形態からクルアーン速習法の活用へ

一般にブンガジアン（pengajian）と呼ばれるイスラーム学習は、ブンガジアン・ウムム（pengajian umum）とブンガジアン・クルアーン（pengajian Qur'an）に分けられる。ブンガジアン・ウムムは、一般向けのイスラーム学習を意味し、説教師による講話、クルアーンやキタブの学習会など、内容は様々である。それに対して、ブンガジアン・クルアーンは、子どものための基礎的なイスラームの学習である。ムスリムがムスリムになるための基本的な学習で

あり、村のモスクや教師の家でクルアーン朗読、日々の礼拝をはじめとする信仰実践、基本的なイスラーム倫理などを学習する〔Yunus 1957, 35〕。ブンガジアン・クルアーンを終えた後、より専門的な学問はポンドック・ブサントレン（イスラーム寄宿塾）^{注3}で学んだ。そこでは、キタブを用いてアラビア語文法やフィクフ（イスラーム法学）を中心に学び、その後、ウラマーとして地域のイスラームを支えた者も少なくなかった。

イスラームに関する学習は、マドラサ（イスラーム学校）だけでなく、一般学校においても宗教教育として、ムスリムの生徒を対象に週2時間行われる。一般学校に通う生徒は、学校から帰宅後、モスクなどで行われるブンガジアン・クルアーンに参加する。ブンガジアン・クルアーンは、イスラーム宗教学校（マドラサ・ディニヤー）^{注4}として営むケースもある。

ブンガジアン・クルアーンの大きな変化は、イクロと呼ばれる速習法の開発によってもたらされた。従来のクルアーン学習では、一つ一つのアラビア文字を順に学んだ後、語彙、文章の読み方の学習へと進んだ。それに対して、イクロは、アラビア文字を覚えることからでなく、母音を表す付加記号が付されたアラビア語の語彙の読み方の学習を行う。

アラビア文字は、単語や文章の位置によって変形する。それを識別して正しく読めるように、テキストではアラビア語の単語やクルアーンの句が例として並べられ、生徒はそれを正しく発音し、読むことを学習する構成になっている。イクロのテキストは6巻まであり、全て学習すると、アラビア語でクルアーンを読めるレベルに達するように構成されている。

クルアーン速習法は、従来から個々に工夫され用いられていたが、イクロが画期的だったのは、クルアーン学習を効果的にするために系統的に整理し、テキスト化した点である。イクロを用いるクルアーン幼児／児童教室は、1990年代以降、全国に数多く設置された。

クルアーン幼児／児童教室では、イクロや他のアラビア語の読み書き教材を用い、習熟度だけでなく、年齢にも配慮し、就学前の幼児のためのクルアーン幼児教室（TKA: Taman Kanak-kanak Al-Quran）と、小学生以上を対象とするクルアーン児童教室（TPA: Taman Pendidikan Al-Quran）に区別して教育が行われる。早期にイスラームの基礎を身につけることを目的とし、就学前の幼児にもイスラーム学習を行う。

クルアーン幼児／児童教室の拡大に与ったのがインドネシア・モスク青年交流会であり、この組織の活動には大学生が多く関わった。

2. イスラーム学習活動への大学生の関与

（1）大学キャンパス及び地域社会での活動

高等教育を受けるため、地方から都市に出てきた敬虔なムスリムの学生は、一般に下宿近くの本モスクで、地域の子どもに無償でクルアーンを教えることが多かった。また、大学キャンパスにおいても、イスラーム活動を活発に展開してきた。

特に、1979年のイラン・イスラーム革命が大きな刺激となり、大学キャンパスでは、ムスリムの学生が中心となって様々な活動が行われるようになった。スハルト政権下では、1970年代後半から80年代にかけて、学生の政治運動に対する弾圧は強められたが、他方で政治的要素を持たない宗教活動や教育活動は比較的寛容な扱いがなされた。

バンドゥン工科大学のサルマン・モスク（Masjid Salman）では、大学生たちによる様々なイスラーム学習プログラムが提供されるようになった。1979年には、「イスラーム集中学習（Studi Islam Intensif）」と称する宗教教育プログラムが開始された〔見市 2002, 108-111；Djamas 1989, 261-265〕。そこでは、イスラームの基本的な教義とともに、家族と社会の中でのムスリムとしての役割、つまり、ムスリムとしての社会的なコミットメントが重視された〔見市 2002, 109〕この教育プログラムの実施には、サルマン・モスクの活動組織の一つ、サルマン・イスラーム青年会（Keluarga Remaja Islam Salman, 略語 KARISMA）で活動する大学生たちが関わった〔Djamas 1989, 260〕。サルマン・イスラーム青年会には、バンドゥン工科大学の学生に限らず、バンドゥン市内の他大学の学生も多く参加した〔Djamas 1989, 256〕。

サルマン・モスクでの活動に参加する学生たちの中には、キャンパス周辺の社会・経済的にはそれほど豊かではない人々が暮らす地域に下宿し〔Djamas 1989, 228〕、地域の学習活動を担った者も多かった。後述するイスラーム学習に関するフォーラムに積極的に関与した者もいた。大学生たちは、サルマン・モスクでの活動の影響を受けつつ、社会の中でのムスリムの役割について考え、その具体的な実践として、地域社会のイスラーム学習活動への関わりを一層強めていった。

学生たちは地域のイスラーム学習活動に関わるなかで、子どものためのイスラーム学習を活性化させることを考えるようになった。1987年には、子どものためのイスラーム学習フォーラム（Forum Silaturahmi Pengajian Anak 略語

FOSIPA, 以下フォーラムと略称)が, ジョグジャカルタで開催された。

このフォーラムは, 子どものイスラーム学習活動を実施する集団・組織間での協力・交流を主たる目的として結成された [FOSIPA Sektor 1993, 1-2]。その後, フォーラムは1988年にスラバヤ, 1989年にスマラン, 1990年にバンドゥン, 1991年に首都ジャカルタで開催され, 各地から大学生が集まった。

西ジャワ州では, 1990年に州内に限ったフォーラムも開催された [FOSIPA Sektor 1993, 4]。この時のフォーラムの運営事務局は, バンドゥン工科大学のサルマン・モスク内に設けられ, サルマン・イスラーム青年会のメンバーが事務局局長を務めた [FOSIPA Sektor 1993, 4 ; 中田 (2003a) 以降の筆者によるインタビュー調査実施年は丸括弧で囲んで表示する]。フォーラムには, 大学生だけでなく, 地域社会でイスラーム学習活動に従事する教師たちも参加した。

バンドゥン市内の学生たちは, フォーラムの開催の他, 1987年と1989年に, バンドゥン・子ども・イスラーム・ジャンボリー (JAMBORE Anak-anak Islam Bandung) を開催した [FOSIPA Sektor 1993, 3-4]。モスクで学ぶ子どもを招いて交流の機会を作り, クルアーン暗誦コンテストやイスラームに関するゲームなど, さまざまな活動を行った。1989年のジャンボリーには, 約1000人の子どもたちの参加があり [FOSIPA Sektor 1993, 3-4 ; 中田 (2003a)], ジョクジャカルタでフォーラムを主催した学生たちも, この時, 視察に訪れている [FOSIPA Sektor 1993, 3]。

大学生の集会に対する政府の監視が厳しく, フォーラムやジャンボリーの開催も容易ではな

かった。活動内容を申告しなければならず, 許可の取得に長い時間を費やした [中田 (2003a)]。しかし, 学生たちは地域社会の活動に関わる中で, イスラーム学習活動の改善を真剣に考え, フォーラムやジャンボリーの開催を実現させた。

(2) クルアーン幼児/児童教室の全国展開 1-インドネシア・モスク青年交流会による クルアーン幼児/児童教室の振興

子どものためのイスラーム学習活動の改善を目指し, クルアーン幼児/児童教室を全国的に広めたのが, インドネシア・モスク青年交流会 (Badan Komunikasi Pemuda Masjid Indonesia, 略語 BKPMI)^{注5)}である。同交流会は, 社会・政治運動を規制されていた学生, 知識人らが中心となり, モスクで活動する若者のための交流や意見交換の場として, 1977年にバンドゥン市内のモスクで組織された [Oghie 2004, 95-96]。現在はインドネシア全国に支部を持ち, 同交流会本部顧問 (Pembina Nasional) には, インドネシア・ウラマー評議会関係者をはじめ, 大臣等の政府高官らが名前を連ねている^{注6)}。

1970年代~1980年代にかけて, 同交流会の活動は, 常に厳しい監視下にあった。同交流会メンバーの中には, 社会運動, 言論活動を厳しく取り締まる政府の体制に不満をあらわにしたため, 投獄された者も少なくなかった。刑務所から出所後, 地域のモスクやランガルでの子どものためのイスラーム学習活動を選択した者もいた。ジョクジャカルタ市のモスク・ムソラ青年会 (Angkatan Muda Masjid dan Musholla, 以下モスク・ムソラ青年会と略称)^{注7)}のムハマド・ジャズィール (Muhammad Jazir ASP) は, ジョクジャカルタ市コタグデにおいて, 地域の宗教教師のアスアド・フマム (As'ad Humam) と出

会い、クルアーン速習法イクロの開発、それを用いたクルアーン幼児教室の運営に従事した [中田 (2004a)]。イクロ及びクルアーン幼児教室を通して、子どものためのイスラーム学習活動の改善を推進するため、インドネシア・モスク青年交流会のメンバーを集めて実施したのが、1989年のダーワ運営研修 (LMD: Latihan Manajemen Dakwah) であった。この研修は、1989年1月に、コタグデのアスアド・フマムの自宅で開設されていたクルアーン幼児教室で実施された。全国27州のうち16州から同交流会中央運営委員会 (Dewan Pengurus Pusat) 役員やモスク・ムソラ青年会のメンバーらが約100人集まり、この時に初めてイクロが紹介された [LPPTKA BKPRMI 1996, 19]。

インドネシア・モスク青年交流会メンバーは、国内の各地にいたため、アスアド・フマムは、このダーワ運営研修の際に、インドネシアの隅々にまでクルアーン幼児教室の普及を迅速に進めるよう、同交流会役員らに要請した [LPPTKA BKPRMI 1996, 19]。

同年5月には、同交流会の全国指導者会議 (Rapat Pimpinan Nasional) が開催され、翌6月に開催予定の全国会議に関する話し合いがもたれた。その時、イクロ及び関連教材の普及を議題のひとつとすることに賛同が得られた [LPPTKA BKPRMI 1996, 19]。

1989年6月27日～30日のスラバヤで行われた第五回インドネシア・モスク青年交流会全国会議では、クルアーンの朗誦ができない子どもを一掃するための活動を展開すること、そのために新たな部門を同交流会に設置することが提案された。クルアーン幼児教室開発指導部 (Lembaga Pembina dan Pengembangan TK Al-

Qur'an, 略語 LPPTKA) が設置されることになり、本部をジャカルタに、支部を各地方に設置することが決められた [LPPTKA BKPRMI 1996, 19-20]。

第一校目のクルアーン幼児教室は、1989年8月2日にバンジャルマシ市内に設置された [Sekretariat TK Al-Qur'an BKPRMI Kalimantan Selatan 1994, 8]。ジャズィール^(注8)もその設置を手伝った [Sekretariat TK Al-Qur'an BKPRMI Kalimantan Selatan 1994, 9]。同交流会南カリマンタン州事務所長のチャイラニ・イドゥリス (Chairani Idris) は、ジョクジャカルタでのダーワ運営研修の際、イクロやクルアーン幼児教室に関心を持った者のひとりであり、南カリマンタン州でのクルアーン幼児教室の普及に尽力した。翌1990年8月14日には、州内の同交流会によるクルアーン幼児教室の合同修了式が行われた。修了式と併せて開催されたクルアーン幼児教室運営のためのワークショップ (Lokakarya Nasional Pengelolaan TK Al-Qur'an BKPMI) では、クルアーン幼児教室のカリキュラムを改善し、標準カリキュラムを作成することが目的とされた。ワークショップの後、クルアーン幼児教室のカリキュラム編成チーム (Tim Perumus) によって、クルアーン幼児教室の標準カリキュラムがまとめられた [LPPTKA BKPRMI Pusat 1998, 1-2]。ジョクジャカルタのジャズィール、南カリマンタン州のチャイラニ・イドゥリス、タシリフィン・カリムらがそのカリキュラム編成チームに加わった。さらに、チャイラニ・イドゥリスとタシリフィン・カリムは、クルアーン幼児教室の指導と開発に関する手引書 ("Buku Pedoman Pembinaan dan Pengembangan TK Al-Qur'an BKPMI") を作成した。この手引

書は、インドネシア・モスク青年交流会中央運営委員会によって、1990年12月に発行された [LPPTKA BKPRMI Pusat 1998, 1-2]。幼児教室の標準カリキュラムは、その後改訂され、1992年には、小学生を対象とするクルアーン児童教室のカリキュラムも整えられた。

2-1 研修を通して広がるクルアーン幼児／児童教室

イクロの活用方法やクルアーン幼児／児童教室の運営に関する研修は、各地で開催された。西ジャワ州では、1991年1月、バンドゥン市内のチパガンティ・モスクで、イクロ活用のための研修が初めて開かれた。続いてクルアーン幼児／児童教室の開設・運営に関する研修も実施された。この研修にはジョクジャカルタのモスク・ムソラ青年会からの支援があった [Dewan Keluarga 1993, 19]。

その後、同州内でのイクロやクルアーン幼児／児童教室の展開の中心的役割を担ったのは、インドネシア・モスク青年交流会のアセップ・ザエナル・アウソップ (Asep Zaenal Ausop)、アデ・ブンヤミン (Ade Bunyamin) らであった。二人は、バンドゥン市北部の陸軍住宅区 (Komplek Angkatan Darat, 略語 KPAD) 内のアッタクワ・モスク (Masjid At-Taqwa) での活動に従事していた。アセップ・ザエナル・アウソップは、当時からバンドゥン工科大学の宗教教育を担当しており、サルマン・モスクでの子どもの教育活動にも関わっていた。

アッタクワ・モスクで活動する若者が結成したアッタクワ・モスク青年会 (Persaudaraan Remaja Masjid At-Taqwa, 略語 PERMATA) の大学生、若者たちも、チパガンティ・モスクでの研修に参加した [Dewan Keluarga 1993, 12,

19]。その後、同モスクでクルアーン幼児／児童教室を開設するための準備が進められた。3月12日、13日にアッタクワ・モスクで実施された、クルアーン幼児／児童教室の運営に関する研修では、同モスクで活動する者たちに限らず、郡 (kecamatan) 内の人々が対象となった。ジョクジャカルタのモスク・ムソラ青年会がこの研修の支援を行った。さらに、4月6日、7日のイクロの研修会では、多くの地域から参加者を募り、西ジャワ州全域から約250人がアッタクワ・モスクに集まった [Dewan Keluarga 1993, 20]。

アセップ氏らは、同年8月、クルアーン幼児教室開発指導部西ジャワ州事務所^(注9)をアッタクワ・モスクに設置し^(注10)、その後もイクロ及びクルアーン幼児教室運営のための研修を数多く開催した^(注11)。研修の実施には、同モスクで活動する大学生、若者も尽力するようになった [Dewan Keluarga 1993, 20]。

1991年以降、研修は、バンドゥン市に限らず、西ジャワ州内の様々な地域でも実施された。大学教員らも積極的にに関わり、イクロを社会に広めていく上での大きな役割を果たした。大学教員の中には、クルアーン幼児教室開発指導部の指導員として研修の実施にあたった者も少なくない [Udin 2001, 13-16]。

また、研修は大学教員の社会奉仕活動として実施されることもあり [Surana et al. 1994]、一般的な教授方法や児童の発達についての講義も行われた。効果的なイスラーム学習の方法であることに加え、早期教育という点からもクルアーン幼児／児童教室の重要性が強調された。

3 クルアーン幼児／児童教室の認定

イスラーム学習にイクロを取り入れるケースは年々増加し、クルアーン幼児教室及び児童教

室を設置するモスクが増加した。クルアーン幼児教室開発指導部が認定し、その運営を監督しているクルアーン幼児教室及び児童教室は、2000年現在、全国に約5万ヶ所設置されており、生徒数は約300万人に達している〔LPPTKA BKPRMI 2000〕^{注12)}。

クルアーン幼児教室開発指導部は、認定校とする教室を開設するための条件を設けている。ジャカルタ市事務所が発行した要項〔Shamsuddin MZ 1999, 44-47〕によれば、まず、教室の運営は、財団やモスク運営者が行うこととしている。教育活動は、モスクなどの学習に適した場所で行われること、学習時間は学校の授業時間と重ならないこと、礼拝の時刻と近接した時間に設定することとしている。また、各教室の教師の6割は、クルアーン幼児教室開発指導部による研修への参加証明書を有すること、また、クルアーンを正しく朗読し、アラビア語を書く能力があることも教師の条件に挙げている。さらに、教室ごとに、生徒の親から成る父母会(Persatuan Orang Tua Santri: POS)を結成することも、認定校の条件とし、父母会では、教室での活動を支援することを目的としている。

クルアーン幼児教室開発指導部では、このような条件を満たす教室で、標準カリキュラムに基づく一定の教育が保障されることになっている。また、各教室での教育の質を保つため、認定校の生徒に共通の修了試験を実施する。教室の運営や管理については、各教室運営者に任されているが、教室の運営状況は、同開発指導部が定期的に監督する仕組みになっている〔Mamsudi AR 1999, 22-23〕。

同開発指導部は、認定校以外にも広く研修の機会を開放し、新しい方法の普及に努めた。イ

クロやクルアーン幼児/児童教室は、クルアーン幼児教室開発指導部の管理下で運営されるものに限られない。イクロを使用し、独自にクルアーン幼児/児童教室を運営するケースや、学習活動は従来通りモスクで行い、教室を設置せずにイクロを使用するケースも多く見られる。

地域のクルアーン教師によって個々に行われてきたイスラーム学習活動は、イクロとクルアーン幼児教室の展開を通して、方法の改善、内容の標準化、組織的運営が図られてきた。

バンドゥン市 A 村^{注13)}における イスラーム学習活動の変化

イクロやクルアーン幼児/児童教室が、地域社会に導入される際、重要な役割を果たしたのは、研修に参加した大学生たちであった。以下で考察するバンドゥン市 A 村は、クルアーン幼児/児童教室が設置される以前から、大学生がイスラーム学習活動に関与してきた地域のひとつである。クルアーン幼児/児童教室が導入される前と後で、大学生の学習活動への関わり方はどう変化し、地域の学習活動にインパクトを与えてきたのか、その変化の実態を考察するため、A 村を調査対象とした。

1. 調査地 A 村の特徴

A 村は、バンドゥン市北部、インドネシア教育大学(Universitas Pendidikan Indonesia, 略語 UPI)の北側に位置し、2001年9月現在、2311人の住民が暮らしている〔Pemerintah Kota Bandung 2001〕。バンドゥン市北部には、以前から規模の大きなプサントレンはなかった。この地域は、オランダ植民地期には、植民地官吏が避暑地として好んだ地域である。バンドゥン

市内の大学キャンパスの周辺は、以前は小さな集落と田畑が広がる地域であり^(注14)、モスクは、現在のように集落単位では存在しなかった^(注15)。その中で、A村にはバンドウン市北部で最も歴史の古いモスクの一つ^(注16)があり、1960年代前半までは、プサントレンも存在した。

大学の近くに下宿する大学生が増えたのは、1960年代半ば以降のことであった。都市部を中心に高等教育機関の拡充が進み、A村にも、その頃から下宿する学生が増えた。

A村では、1920年代に、住民の一人がワカフ(イスラーム寄進財)の土地にモスクを設置した。その息子が、西ジャワ州チレボンのプサントレンなどで学んだ後、この村に戻り、イスラーム学習の指導にあたった[中田(2001a)]。村外からのサントリ(生徒)が増えるに伴い、アスラマ(寄宿舎)が設置され、プサントレンとしての形態が整えられた。当時のサントリは、日中はキヤイと共に田畑で農作業をし、日没後に学習を行った。

しかし、1960年代以降、キヤイの後継候補者たちは、国家公務員などの村外で仕事に就くケースが多くなった。サントリと生活を共にしながら指導にあたることができる者がいなくなり、サントリは減少した。しかし、村の子どもを対象とした日没後のイスラーム学習だけは継続された。

2. 村の学習活動に参加する大学生

1960年代頃まで、A村の子どものためのイスラーム学習は、村のモスクだけでなく、個人の家でも行われていた[中田(2001b; 2001c)]。教師が一人一人の生徒を指導するソロガン^(注17)や、教師を囲んで生徒たちが座り、学習するバンドンガン^(注18)などの教授法が用いられた。日

没(マグリブ)の礼拝を、男子生徒はモスクで、女子生徒は教師宅で行い、その後、学習は、同じ場所で実施された。1970年代までは、学習の後宿泊し、翌日の夜明け前(スブ)の礼拝を合同で行った後、帰宅するのが一般的であった[中田(2001c)]。しかし、次第にこうした「泊り」の学習形態から「通い」の形態に変化していった。

A村に下宿し始めた大学生の中に、イスラーム学習活動を手伝う者も出てきた。また、成人を対象とするイスラーム講話会で講話者を務めたり、金曜礼拝の説教を任されることもあった[中田(2002a; 2002b)]。バンドウン教育大学(Institut Keguruan dan Ilmu Pendidikan Bandung, 略語 IKIP Bandung)^(注19)の学生が多く、特にアラビア語学科で学ぶ学生が積極的に役割を果たした。バンドウン教育大学のアラビア語学科は、宗教師範学校(Pendidikan Guru Agama 略称 PGA)やイスラーム高校(Madrasah Aliyah)出身者が多く、プサントレンでの学習経験を持つ学生も含まれた。アラビア語学科では、アラビア語の学習とともに、イスラームの学習にも重点が置かれ、学生たちはキャンパス内モスクで行われるイスラーム学習活動にも積極的だった[Syahidin 2001, 136-137]

当時、A村のモスクは正式な名称をもたず、単に「A村のモスク」とよばれていた。それに「アル・ヒクマ(Al-Hikma)^(注20)」と命名の提案をした学生も、アラビア語学科に在籍し、A村に下宿していた[中田(2002a)]。住民側も学生たちの提案を受け入れ、現在でもその名称が用いられている。

3. 大学生による一般学校の設置

1960年代頃のA村では、子どもたちの学校

教育の機会が、非常に限られており、学生たちは、モスクやブサントレンの寄宿舎^(注21)を利用して、子どもたちのために一般教科を教え始めた[中田(2002a; 2002b)]。学生たちが、正式に小学校の設置を提案すると、アルヒクマ・モスク組織委員会は、その提案を受け入れた。そして、モスクに隣接するワカフの土地に校舎が建てられ[Buchori 2000, 1], 学生たちが教師を務めた[中田(2002a)]。

1966年、A村の学校は、私立の小学校(Sekolah Dasar, 略語SD)として教育文化省に登録され、その後、1973年に中学校(Sekolah Menengah Pertama, 略語SMP)も設置された。バンドゥン教育大学の学生は、卒業後は教員になることが義務付けられていた[中田(2002b)]。ため、当時の学生G氏は、大学卒業後、国立中学校で教員を務めた。その傍ら、G氏は1970年代に財団Hを自ら創設した。A村の小・中学校は、この財団の下で運営されるようになった。

1975年に、中学校の最初の卒業生を送り出した時、中学校は、教育文化省の「登録(Terdaftar)」のステイタスにあった^(注22)。国立学校と「同等」のステイタスではなかったため、高校進学を希望する生徒は、G氏が勤務していた国立中学校で前期中等教育修了のための全国最終段階学力試験(EBTANAS: Evaluasi belajar tahap akhir nasional)を受けなければならなかった。その後、1977年頃からG氏はA村の小・中学校で教える大学生に、正式な教員資格を取得するよう勧めた[中田(2002a)]。教員資格を持つ教員数を増やし、中学校を「登録(Terdaftar)」レベルから「認定(Diakui)」レベルへと昇格させた。当時、小・中学校では、

授業料はほとんど徴収できなかった[中田(2002b)]。財団の下での運営とはいえ、運営資金はわずかな授業料に依存し、極めて乏しかった。しかし、学校での授業は学生たちが無償で支えた。

1960年代から70年代にかけて、学生たちは学校教育の提供に取り組み、A村の教育を充実させることに貢献した。1989年以降、学生の一人が、A村の女性と結婚し、A村に居住した頃から、小・中学校を卒業したA村住民の中に、教員を務める者が増え始めた。

4. イスラーム学習活動の組織化

(1) モスク青年会の結成とイスラーム宗教学校の開設

1980年代初頭から、A村のイスラーム学習活動に変化が見られ始めた。A村に下宿していた学生たちは、1983年9月24日にモスク青年会(Ikatan Remaja Masjid, 略語IMAJID)を結成し[Patonah 1989, 3], アルヒクマ・モスク組織委員会の許可の下、モスクで活動を行うほか、それぞれの下宿でもイスラーム学習活動を行うようになった^(注23)。この青年会には、アラビア語学科の学生だけでなく、理科系の学生も加わった^(注24)。当時、学生の活動への規制は厳しかったが、敬虔なムスリムの退役軍人の中には、学生たちの活動を支援する人々も少なくなかった^(注25)。モスク青年会の活動は、A村内での学習活動に留まらなかった。1988年以降は、イスラーム講話会の説教師や様々なイスラーム活動の運営を担当できる人材育成のための研修を行うようになった。研修を受けた学生たちは、A村以外の地域に活動を広げ、農村でダーワ活動も行った。こうした活動には、モスク青年会のメンバー以外の学生も積極的に参加した。

A村の若者の中には、モスク青年会の活動に参加し、学生と共に活動する者もいたが、A村のイスラーム学習活動を組織的に営むことを志向する者がいた。1980年代半ば頃、西ジャワ州バンドゥン県、タシクマラヤ県のプロサントレンで学習を終えて帰郷したA村の若者たちが中心となってイスラーム宗教学校（マドラサ・ディニヤール：Madrasah Diniyah）が開設された〔中田（2001b）〕。

以前は、モスクやクルアーン教師宅などの、複数の場所でイスラーム学習は行われていた。しかし、イスラーム宗教学校が開校してからは、A村の子どものためのイスラーム学習活動の場が一ヶ所にまとめられた。イスラーム宗教学校は、アルヒクマ・モスクと小・中学校校舎が使われ、基礎的なクルアーン学習が従来通り教えられた。それに加え、プロサントレンでの学習経験を持つ者が、例えばイスラーム法やイスラーム倫理など、イスラーム教義に関する内容のうち、それぞれ得意とする分野を教えた^{〔注26〕}。

（2）クルアーン幼児／児童教室の設置とその影響

モスク青年会の学生たちの中には、インドネシア・モスク青年交流会によるイクロの研修に参加し、子どものためのイスラーム学習の組織化に関心を持つ者がいた。そうした学生たちが、1991年、A村にクルアーン幼児／児童教室を開設することを提案した。アルヒクマ・モスク組織委員会は、標準化されたイスラーム学習の実施に賛同し、A村でのクルアーン幼児／児童教室の設置を認め、学生たちが教育の主たる担い手となった^{〔注27〕}。

従来、子どもたちのイスラーム学習が行われるのは、日没の礼拝後であった。主として小学

生以上が参加するイスラーム宗教学校はあったが、就学前の幼児のための学習は組織的に営まれていなかった。また、午前中の小・中学校の授業の終了後、学校校舎は、日没後のイスラーム宗教学校の時間まで使用されることはなかった。しかし、1991年、クルアーン幼児／児童教室が設置されると、夕方4時には、イスラーム服を身に着けた幼児たちが学校の校舎に集まって学習を開始するようになった。

クルアーン幼児／児童教室では、インドネシア・モスク青年交流会のクルアーン幼児教室開発指導部の作成した標準カリキュラムに依拠した教育が行われた。クルアーン幼児／児童教室の開設は、イスラーム宗教学校での教育方法にも影響を与えた。A村の若者たちは、学生たちが用いるイクロを、イスラーム宗教学校でも活用することを決定した。また、生徒の性別及び習熟度別に学習グループを作り、グループ別に年間の学習計画を立てるようになった。半年に1回は、学習した内容の習熟度テストも実施するようになった。A村の若者らは、教育及び運営の中心的な担い手として、イスラーム宗教学校を独自に発展させることを志向した。

イスラーム宗教学校が対象とする生徒は、就学前児童から中学生程度である。したがって、部分的にクルアーン幼児／児童教室が対象とする就学前児童、小学生と重複している^{〔注28〕}。また、イスラーム宗教学校の就学前児童から小学生程度を対象とする学習内容とクルアーン幼児／児童教室の学習内容はほとんど同じである。両者ともに、イスラームの基礎を学習することを目的としており、内容は、クルアーンの朗読の学習、日々の祈りの暗誦、礼拝の仕方等で構成されている。

しかし、イスラーム宗教学校とクルアーン幼児／児童教室は、一つの教育組織をつくるのではなく、別個に運営されてきた。クルアーン幼児／児童教室の教師を務めたのは学生たちであったが、教室は、地域住民が結成した財団 M の下で運営する形態がとられた。クルアーン幼児教室開発指導部の認定を得るには、モスク組織委員会、もしくは財団等が教室の運営にあたる必要がある [Syamsuddin MZ 1999, 44]。イスラーム宗教学校と同様に、アルヒクマ・モスク組織委員会の下で運営することも可能であった。しかし、新たに財団が組織されたことは、村のモスク組織委員会に頼らず、また、学生に全てを任せるのではなく、A 村住民が自ら営むことを志向する姿勢の現われでもあった。

バンドゥン市 A 村における教育活動の担い手と運営形態

1960年代以降、A 村では、大学生の関与を通して、教育活動は大きく変化してきた。図 1

では、1960年代以降の A 村の教育活動の担い手とその変化を示した。イスラーム学習活動のみが営まれていた A 村は、学生の関与により、複数の教育施設が設置された。2001年現在では、教師も運営者も、地域住民が中心的な役割を担いつつある。

以下では、2001年以降の、A 村の教育活動に従事する教師の特徴と、A 村の教育活動全体の運営状況について検討する。

1. 住民主体の教育活動へ

A 村における教育活動は大きく三つに分けられる。一つは、私立の小・中学校である。開校当初は大学生が教師を務めていた。2003年現在では、教員資格を有する者はわずかではあるが、多くの地域住民が教員を務めている。小学校は、校長のみが教育大学で学士を取得しており、教員資格^(注29)を有している。他の教員 8 人は、現行の制度の下では教員資格を満たしていない。8 人中 6 人が師範学校卒業者、2 人は一般高校卒業者である。表 1 に示したように、8 人の教員は、A 村で育ち、イスラーム学習も

図 1 A 村の教育活動の担い手とその変化

	A 村住民による教育プログラム	大学生による教育プログラム
1960～1970年代	ブンガジアン・クルアーン	小・中学校
1980年代	↓ マドラサ・ディニヤー (イスラーム宗教学校)	モスク青年会 (IMAJID) の結成
1990年代	↓	↓ クルアーン幼児／児童教室 (TKA/TPA)
現在	↓	↓

(出所) 筆者作成。

(注) 点線(――)は、住民を主体とする教育プログラムと学生を主体とする教育プログラムの境界を示す。

小・中学校の教育もこの村で受けた。校長を務めるのは、学生時代にこの学校で教えていた経験がある者である。A村の女性との結婚後、A村の住民となり、1989年以降、アルヒクマ・モスク組織委員長も務めている。

他方、中学校でも教員資格を持つのは校長のみである。その他12人の教員は、教員資格を満たしていない。そのうち2人がA村で育ち、高校、大学以上の学歴を持つ。残りの10人は現役の大学生が交代で教員を務めている^(注30)。

二つ目は、クルアーン幼児／児童教室である。1991年に創設された当初は、モスク青年会の大学生が教育の担い手であった。2001年現在は、教師は全て女性であり、そのほとんどを高校もしくは師範学校卒業以上の学歴を持つA村住

民が占めている。

三つ目のイスラーム宗教学校は創設当初、西ジャワ州のバンドゥン県、タシクマラヤ県のプサントレンでの学習経験者によって営まれた。表1によれば、2001年現在でもプサントレンで学習した教師が5人いる。しかし、大半の教師は、プサントレンでの経験を持たない。教師たちは、クルアーン幼児／児童教室の教師と同様に、A村で育ち、A村においてイスラーム学習と学校教育を学んだ。教師の学歴を見ると、高校卒業以上の学歴を持つ者が多く、18人中8人を占める。教師の半数を占める高校・大学在籍者らは、プサントレンでの学習経験者とは異なり、イスラーム教義の専門知識を学んではいない。彼らは学校で学ぶ傍ら、子どものための

表1 A村の小・中学校教員とクルアーン幼児／児童教室及びイスラーム宗教学校の教師の特徴

			クルアーン幼児／児童教室	イスラーム宗教学校
	小学校	中学校		
人数	9(8)	13	6(6)	18(9)
A村在住者	8(7)	3	5(5)	18(9)
A村小学校卒業生	8(7)	2	2(2)	12(6)
A村中学校卒業生	8(7)	2	5(5)	11(7)
A村小・中学校卒業生	8(7)	2	2(2)	9(6)
A村でイスラーム学習をした者	8(7)	2	5(5)	17(9)
プサントレンでの学習経験者	2(1)	1	1(1)	5(1)
現役高校生			0	7(5)
現役大学生		10*	1(1)	2(2)
中学卒業生			1(1)	1(1)
高校/師範学校卒業生	8(7)	1	3(3)	7(1)
大学卒業生	1	2	1(1)	1(0)

(出所) インタビューに基づき筆者作成。

()内は、女性の人数。 * は、男女合計の人数。

のデータは、2003年7月24日に実施したA村住民の元イスラーム宗教学校教師J氏とのインタビューに基づく(*男女合計の人数)。 は、2001年2月24日、9月5日～12日に実施した教師とのインタビューに基づく。

基礎的なイスラーム学習の指導にあっている。

A村に下宿をしていた大学生やブサントレンでの学習経験のあるA村の住民から、学校教育と基礎的なイスラーム学習を学んだA村の若者たちが、今度は村の教育活動の担い手として、「知識ある者が知識を伝える」というイスラーム学習の伝統を新しい形で継承している点は興味深い。

2. 住民主体の運営をめぐる

A村の三種の教育活動は、それぞれ異なる組織の下に運営されてきたが、2001年、新たな運営の構想が持ち上がった。

小・中学校は、教員の大半をA村住民が務めるにもかかわらず、運営権は依然として財団Hが保持している。小・中学校の創設に直接関わった学生で、現在インドネシア教育大学教員を務めるG氏が財団Hを主宰する。一方、イスラーム宗教学校は、モスクの活動として、アルヒクマ・モスク組織委員会の下で運営されている。さらに、クルアーン幼児／児童教室は、モスク組織委員会のメンバーや地域住民で構成された財団Mが営んでいる。これらをA村住民が主体となって、ひとつの財団の下で運営していくことが検討されている。

しかし、小・中学校の運営権に関しては、A村の住民らは、財団Hの創設者に対して慎重な対応が必要となっている。1960年代には、大学生が中心となって学校を設置し、A村住民の多くがその学校教育の機会に与ってきた。今日もなお、運営権は元学生が保持し、小・中学校は財団Hの下にある複数の学校の一つとして運営されている^(注31)。小・中学校への寄付金・補助金の用途には、A村住民の意向が直接反映されるわけではない。全て財団Hの判

断の下でその用途が決定される。

A村及びその周囲のモスクにおけるイスラーム学習活動には、学生が関与してきた。かつてA村やその周辺に下宿し、現在は大学教員になっている者たちの中には、今日でも住民らと共に交代で金曜礼拝時の説教師を務める者もいる。A村住民にとって、信仰生活上、密接な関係にある人々もいる。運営権を財団Hから譲り受ける場合、慎重に対応していきたいと考える住民が多い。住民の代表者たちは、「お願いするからには、教師がほとんど住民であることに加え、活動運営や資金調達の面でも、十分自分たちでやっていけることを示した上で、快く権利を譲ってもらいたい^(注32)」と言う。

大学キャンパス周辺の地域社会での教育活動には、学生が担い手として大きな役割を果たしてきたと自負する大学教員も少なくない^(注33)。A村の住民もその点は充分承知しており、だからこそ、今後も彼らと良い関係を保持できるよう願っている。この運営権移譲の問題は、住民にとって慎重に扱われるべき難題である。運営権をめぐるこうした問題が浮上したことは、住民の教育活動に対する意識の高まりを示すものである。

おわりに

A村の事例に見られるように、大学生の関与は、(1)一般学校の教育機会の提供に始まり、モスク青年会の結成、クルアーン幼児／児童教室の設置へと続き、(2)それが住民のイスラーム学習に対する関心を高め、住民主体で営んできた子どものためのイスラーム学習活動は、イスラーム宗教学校として、組織的に営ま

れるようになった。(3)さらに、住民は、外部の人々に頼らず、A村の全ての教育活動を独自の運営組織の下で営むことを目指すようになった。

旧スハルト体制の下で社会・政治活動を規制された大学生は、モスクでの宗教活動の推進に努めた。その中には、子どものイスラーム学習活動に従事する者も多く含まれた。大学生の働きかけが、村のレベルでイスラーム学習活動の学校組織化を促進し、さらに教育全体の運営に対する住民の意識も活性化された点は注目に値する。

近年のインドネシアでは、学校教育の普及から予期されるような、伝統的な宗教教育が周辺化する動きは見られない。地域社会のイスラーム学習活動は、制度的に整えられていないものも多いが、効果的な学習方法を導入し、学習活動の質を向上させようとしている。幼児教育の関心も高まり、イスラーム・アイデンティティの形成と関わって、イクロとクルアーン幼児/児童教室は人々の期待と支持を集めてきた。

マレーシアやシンガポールなどの近隣諸国にも、イクロとクルアーン幼児教室は取り入れられ、発展のきざしを見せつつある。今後は、そうした拡がりにも着目し、考察していく必要があるだろう。

(注1)インドネシアのイスラーム一般に関する研究には、インドネシアの代表的なイスラーム組織のひとつであるムハマディヤの発展に関する歴史・文化人類学的な研究[Nakamura 1983]や、インドネシアのイスラーム復興と政治・社会変容に関する研究[Hefner 2000]などがある。

(注2)筆者が国際文化教育交流財団の助成の下、インドネシア教育大学留学中(2000年9月~2001年12

月)に行ったインタビュー及び観察と、その補足として2002年9月、2003年7月に行ったインタビューに基づく。

(注3)キヤイの下に、師事するサントリ(生徒)が集まり、寄宿生活を送りながらキタブを学ぶ教育組織のこと。

(注4)マドラサは、アラビア語で「学校」を意味し、ディニヤーは「宗教」を意味する。インドネシアでは、マドラサはイスラーム学校を指す用語として使われる。一般マドラサとマドラサ・ディニヤーの二種類に分けられ、一般マドラサは、宗教科目だけでなく一般科目にも多くの時間が割かれる。他方、マドラサ・ディニヤー(イスラーム宗教学校)は、イスラーム関連科目のみが教えられる。以下、本文では、イスラーム宗教学校の用語を使う。

(注5)1993年の全国会議でBKPMI(Badan Komunikasi Pemuda Masjid Indonesia)からBKPRMI(Badan Komunikasi Pemuda Remaja Masjid Indonesia)に改称された。

(注6)例えば、同青年交流会下で運営されるクルアーン幼児教室開発指導部の全国指導者(Pimpinan Nasional)には、1993年~1996年の間、国務大臣(当時、その後1998年~1999年に大統領)で、全インドネシア・ムスリム知識人協会(ICMI)会長のハビビ氏も含まれていた[LPPTKA BKPRMI 1996, 24]

(注7)モスク・ムソラ青年会は、ジョクジャカルタ市内の大学の学生らが参加していたクルアーン輪読グループ(Tim Tadarus)である。

(注8)1993年までクルアーン幼児教室開発指導部長を務めていた[LPPTKA BKPRMI 1996, 20]

(注9)後にLPPTKAの西ジャワ州事務所は、バンドゥン市内のガルンガン・クロン(Garungan Kulon)地区へ移動。2002年現在、西ジャワ州中央ダーワ・モスク(Masjid Pusat Dakwah Islam: PUSDAI)内にも事務所を構えている。

(注10)2003年7月26日に、アセツプが営むイスラーム教育財団事務所にて筆者(中田)が行ったアセツプへのインタビューと、2001年2月26日、8月5日、12月8日に、アツクワ・モスクにて行った筆者(中田)によるN氏へのインタビュー。

(注11) 2003年7月26日に筆者が行ったアセツプへのインタビュー。

(注12) インドネシア全国のクルアーン幼児/児童教室は、他のイスラーム組織や民間財団等が監督し運営しているものもあり、その数及び生徒数は、この数よりも多い。

(注13) 本稿では、バンドゥン市S郡F村内のひとつの集落を「A村」とする。

(注14) 20世紀初め、バンドゥン工科大学近辺のチカバンドゥン川周辺は、段々畑の広がる田園地帯であったことがうかがえる [Kunto 1984, 281, 写真資料]

(注15) 2002年9月23日にバンドゥン工科大学教官I氏の自宅にて、筆者(中田)が行ったI氏へのインタビューと、2003年7月25日にインドネシア教育大学にて行った筆者(中田)による宗教教育担当教官らへのインタビュー。

(注16) 設置年は、1981年とある [Depag Kotamadya Bandung, Pemerinah Daerah Kotamadya DT Bandung, 1998] が、実際は、1920～30年代頃までには、設置されていた [中田(2001a)]

(注17) ソロガンでは、生徒が学んでいる kitab の写しを一人ずつ持って教師の所に行く。教師の前で、生徒がそれを朗読し指導を受ける [西野 1990, 37-38]

(注18) バンドゥンとは、生徒が教師の周りに輪になって座り、教師は、講義をするようにテキストを読み、注釈を加える方法。ソロガンと共に、プサントレンでの主たる教授法の一つ [西野 1990, 37-38]

(注19) 現インドネシア教育大学。バンドゥン教育大学 (IKIP Bandung) は、2000年にインドネシア教育大学 (UPI) へと改称した。

(注20) A村の匿名性を保つため、モスクの名称は仮称を用いた。

(注21) 現在では、大学生のための宿舎として使われている。

(注22) 私立学校のステイタスは、当時、教育文化省によって「登録 (Terdaftar)」、「認定 (Diakui)」、及び「同等 (Disamakan) の3つが与えられた。施設・設備の状況や資格取得教員の人数などの条件に基づいて審査が行われ、ステイタスが決定された。しかし、この方式は、地方分権化に伴い改訂された。2002

年以降の小・中学校の場合は、県もしくは市政府が設置する学校基準認定委員会 (BAS: Badan Akreditasi Sekolah) によって、学校ごとに基準認定が行われるようになった [Departmen Pendidikan Nasional 2002]

(注23) 中田(2001d)と2001年10月29日にA村にて行った筆者(中田)による、アルヒクマ・モスクのモスク青年会の元メンバーT氏へのインタビュー。

(注24) モスク青年会結成に関わった元学生の一人は、理化学系を専攻していた。その後ドイツに留学し、現在はインドネシア教育大学の教官を務めている [中田(2001d)]

(注25) 2001年7月16日、10月18日、29日にA村の元モスク青年会メンバーのE氏宅にて行った、筆者(中田)によるE氏へのインタビュー。

(注26) 2001年11月30日、12月1日に、A村にて行った筆者(中田)による、元イスラーム宗教学校の教師でA村在住者のJ氏へのインタビュー。

(注27) 2001年9月21日A村の前アルヒクマ・モスク組織委員長B氏宅にて行った、筆者によるB氏へのインタビュー。

(注28) イスラーム宗教学校も、クルアーン幼児/児童教室も生徒の大部分は、A村の子どもである。しかし、2001年現在では、クルアーン幼児/児童教室の生徒は、A村外から通う生徒も存在した。

(注29) 学校教員は教育大学及び総合大学の教育学部の教職課程で学び資格を得る。小学校教員の養成には、高校卒業後、二年間のディプロマ課程で行われる。他方、中学校教員は学士号取得が必要とされる。

(注30) 2002年9月22日にA村にて行った筆者(中田)によるA村小学校教員とのインタビューと、2003年7月24日にA村にて行った筆者(中田)による元イスラーム宗教学校の教師でA村在住者のJ氏(注26と同一人物)へのインタビュー。

(注31) 2002年現在、A村の小・中学校の他に、財団Hは小学校、中学校、高校を他の地域で運営している。

(注32) 2002年9月26日にA村にて行った筆者(中田)による元イスラーム宗教学校の教師でA村在住者のJ氏(注26, 30と同一人物)へのインタビュー。

(注33) 2002年9月及び2003年7月に行った複数の
大学教官との対談から筆者が確認した。

文献リスト

<日本語文献>

- 小林寧子 1988. 「19世紀末のジャワのイスラーム教育
とプサントレン」『アジア経済』第29巻第10号
2-21 .
- 西野節男 1990. 『インドネシアのイスラーム教育』勁草
書房 .
- 服部美奈 2001. 『インドネシアの近代女子教育 イ
スラーム改革運動の中の女性』勁草書房 .
- 見市健 2002. 「民主化期におけるイスラーム主義の台
頭 インドネシアのダーワ・カンブスと正義
党」日本比較政治学会年報第4号『現代の宗
教と政党 比較のなかのイスラーム』早稲
田大学出版部 97-129 .

<英語・インドネシア語文献>

- Bruinessen, Martin van 1992. *Tarekat Naqsyaba-
ndiyah di Indonesia: Survei Historis, Geografis,
dan Sosiologis* [インドネシアにおけるナクシャ
バンディー教団：歴史学的, 地理学的, 社会学的
研究]. Mizan.
1995. *Kitab Kunung, Pesantren dan Tarekat:
Tradisi-tradisi Islam di Indonesia* [キタブ・ク
ニン, プサントレンとタレカット：インドネシア
におけるイスラームの伝統]. Mizan.
- Buchori, Muslim 2000. *Riwayat Tanah Wakaf* [ワカ
フとして寄進された土地の歴史]. Bandung.
- Depag Kotamadya Bandung, Pemerinah Daerah
Kotamadya DT Bandung [宗教省バンドウン
市事務所, バンドウン市政府] 1998. *Data
Tempat Peribadatan Umat Islam (Masjid,
Langgar dan Mushalla) di Kotamadya Bandung
Tahun 1998* [1998年バンドウン市におけるムス
リムの礼拝施設(モスク, ランガル, ムソラ)の
統計資料]. Bandung.
- Departmen Pendidikan Nasional Keputusan Menteri
Pendidikan Nasional Republik Indonesia[インド

ネシア共和国国民教育大臣決定] Nomor 087/U/
2002. *Akreditasi Sekolah* [学校認定].

- Dewan Keluarga (Dewan Keluarga Masjid At-
Taqlwa Komplek Perumahan Angkatan Darat
Gegerkalong) [ゲゲルカロロン陸軍住宅区アッタク
ワ・モスク組織委員会] 1993. *Riwayat Singkat,
Pertumubuhan dan Perkembangan Masjid At-
Taqlwa komplek perumahan Angkatan Darat
Gegerkalong, Bandung, Menyambut Peringatan
DWI WINDU(16 tahun) Berdirinya Masjid At-
Taqlwa KPAD Gegerkalong Bandung. 20 Mei
1977-20 Mei 1993* [略史 バンドウン市ゲゲルカ
ロン陸軍住宅区アッタクワ・モスクの設立とその
発展, アッタクワ・モスク設立16周年記念との関
係で 1977年5月20日～1993年5月20日].
Bandung.

Dhofier, Zamakhsyari 1982. *Tradisi Pesantren, Studi
tentang Pandangan Hidup Kyai* [プサントレン
の伝統, キヤイの人生観に関する研究]. LP3ES.

Djamas, Nurhayati 1989. “Gerakan Kaum Muda
Islam Masjid Salman” [サルマン・モスクにおけ
る青年ムスリムの運動]. In *Gerakan Islam
Kontemporer di Indonesia* [インドネシアにお
ける現代イスラームの動向]. ed. Abdul Aziz,
Imam Tholikhah and Soetarman, 207-287.
Jakarta: Pustaka Firdaus.

FOSIPA Sektor (Kodya Bandung, Kab. Bandung,
Kotif Cimahi, Kab. Subang, Kab. Sumedang)
Bandung [FOSIPA 第一地区(バンドウン市, バ
ンドウン県, チマヒ市, スパン県, スメダン県)]
1993. *Selayan Pandang Forum Silaturrahmi
Pengasuh Pengajian Anak-anak (FOSIPA) [子
どものためのプンガジアン指導者のためのフォー
ラムの概要]*. Bandung.

Hefner, Robert W. 2000. *Civil Islam: Muslims and
Democratization in Indonesia*. Princeton:
Princeton University Press.

Kunto, Haryoto 1984. *Wajah Bandung Tempo Dulu*
[旧き時代のバンドウン]. Bandung: PT Ganesia.
LPPTKA BKPRMI 1996. *Sekilas Catatan Perjalanan*

- LPPTKA [クルアーン幼児 / 児童教室開発指導部の歩み]. Jakarta .
- LPPTKA BKPRMI 2000. *Data Base Perkembangan Santri Se-Indonesia* [インドネシア全国における生徒数に関する統計資料]. Jakarta.
- LPPTKA BKPRMI Pusat [インドネシア・モスク青年交流会, クルアーン幼児教室開発指導部中央事務所] 1998. *Panduan Kurikulum & Pengajaran Taman Kanak-kanak Al-Qur'an (TKA) Taman Pendidikan Al-Qur'an (TPA)* [クルアーン幼児 / 児童教室におけるカリキュラムと教授についての概要]. Jakarta.
- Mamsudi AR 1999. *Panduan Manajemen dan Tata Tertib TK/TP Al-Qur'an* [クルアーン幼児 / 児童教室の運営及び諸規則の概要]. LPPTKA BKPRMI.
- Nakamura, Mitsuo 1983. *The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town*. Gadjah Mada University Press.
- Oghie, Harianto 2003. *Sketsa Gerakan: Refleksi dan Otokritik BKPRMI* [運動の概要 : インドネシア・モスク青年交流会の内省と自己批評]. BKPRMI Kota Bandung.
- Patonah, Nanay P. 1989. *Tinjauan Historis tentang IMAJID Miftahul Iman Negla RW4, Bandung* [バンドゥン市ミフタフルイマン・モスクにおけるモスク青年会の歴史的考察]. diajukan untuk memenuhi salah satu tugas dalam mata kuliah Pendidikan Agama Islam [イスラーム教育の課題レポート]. Jurusan Pendidikan Kesejahteraan Keluarga Fakultas Keguruan Teknologi Kujuruan IKIP Bandung [バンドゥン教育大学技術教育学部家政科教育学科].
- Pemerintah Kota Bandung [バンドゥン市政府] 2001. *Daftar Rekapitulasi Jumlah Penduduk Kota Bandung. September 2001, Kecamatan Sekasari*. [バンドゥン市人口統計概要資料 : 2001年9月スカサリ郡]. Bandung.
- Sekretariat TK-AI-Quran BKPRMI Kalimantan Selatan [南カリマンタン州インドネシア・モスク青年交流会クルアーン幼児教室事務局] 1994. *Kilas Balik 5 Tahun TK-AI-Quran BKPRMI Kalimantan Selatan 14 Agustus 1989-1994M, 12 Muharram 1410H*, " *Sejarah dan Kiprahnya* " [1989年8月14日～1994年までの南カリマンタン州インドネシア・モスク青年交流会クルアーン幼児教室の5年間の記憶 " 歴史とその発展 "]. Banjarmasin.
- Surana, Dedih et al. 1994. *Penataran Pengajaran Baca-Turis Al-Qur'an Melalui Metode IQRA' Bagi Guru-guru "Ngaji" Guru-guru Madrasah Diniyah Se-Kelurahan Sukanegla, Kecamatan Garut Kota, Kab. DT. II Garut* [ガルット県ガルット市スカネグラ村のクルアーン学習活動教師及びイスラーム宗教学校教師のためのイクロによるクルアーンを読み書き指導に関する研修会]. Lembaga Penelitian Dan Pengabdian Kepada Masyarakat Universitas Islam Bandung [バンドゥンイスラーム大学社会奉仕活動研究所].
- Syahidin 2001. *Pengembangan Pendidikan Agama Islam di Perguruan Tinggi Umum: Studi Kasus di IKIP Bandung Tahun 1966-1999* [高等教育機関におけるイスラーム教育の発展 : 1966年～1999年までのバンドゥン教育大学の事例を中心に] Ph.d diss., Institut Agama Islam Negeri Syarif Hidayatullah Jakarta [国立イスラーム宗教大学ジャカルタ校].
- Syamsuddion MZ 1999. *Kebijaksanaan Umum & Kiat Sukses Pengelolaan TK/TP Al-Qur'an* [クルアーン幼児 / 児童教室の一般的な施策と円滑な管理・運営の要領]. LPPTKA BKPRMI DKI Jaya.
- Udin, Supriadi 2001. *Pendidikan dan Pelatihan Cara Cepat Membaca dan Menulis Al-Qur'an Metode "Universitas" bil-Hikmah bagi Guru Agama SD & SLTP di Kotamadya Bandung, Laporan Pelaksanaan Pengabdian kepada Masyarakat* [社会奉仕活動報告書 : バンドゥン市内における小・中学校宗教教員のためのクルアーン読み書き速習法, 「大学用」ビル・ヒクマの

研究ノート

教育と研修]. Jursan MKDU FPIPS, Lembaga Pengabdian Kepada Masyarakat, Universitas Pendidikan Indonesia Bandung [インドネシア教育大学社会科学教育学部一般教養学科, 社会奉仕活動研究所].

Yunus, Muhammad 1957. *Sejarah Pendidikan Islam di Indonesia* [インドネシアのイスラーム教育史]. Hidakarya Agung Jakarta.

<インタビュー調査>

中田有紀(2001a)「2001年 2月24, 25日, 5月11日, 6月9日, 9月4日, 26日他に複数回モスク組織委員長 M 氏自宅にて行った筆者(中田)による M 氏へのインタビュー」

(2001b)「2001年9月12, 13日に, A 村にて行った筆者(中田)によるイスラーム宗教学校教師 D 氏及び A 村小学校校長 A 氏へのインタビュー」

(2001c)「2001年9月12, 13, 26日に, A 村にて行った筆者(中田)によるブンガジアン・ウムムに参加している婦人 A, 婦人 B へのインタビュー」

(2001d)「2001年9月24日に, インドネシア教

育大学にて行った筆者(中田)による, 元モスク青年会メンバーで現在インドネシア教育大学の教官 S 氏へのインタビュー」

(2002a)「2002年9月18日に, インドネシア教育大学にて行った筆者(中田)による, 学生時代に A 村に下宿していた G 氏(現在インドネシア教育大学教官)へのインタビュー」

(2002b)「2002年9月20日に, 学生時代 A 村の教育に関わった D 氏(現在インドネシア教育大学教官)の自宅にて, 筆者(中田)が行った D 氏へのインタビュー」

(2003a)「2003年7月25日にインドネシア教育大学にて行った, 学生時代に, 1990年の FOSIPA, バンドウン・子ども・イスラーム・ジャンボリーのバンドウン市での開催に携わった教官へのインタビュー」

(2004a)「2004年9月8日, ジョクジャカルタ市内のジャズィール宅にて行った, 筆者によるジャズィールへのインタビュー」

(名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程, 2003年12月17日受付, 2004年7月7日レフェリーの審査を経て掲載決定)